

高尾山山頂から発信！

のぶすま

「のぶすま」とはムササビの古い呼び名です。

vol.61 季刊
2020年秋号

トリさんこちら♪ 秋の高尾の魅惑の木の実

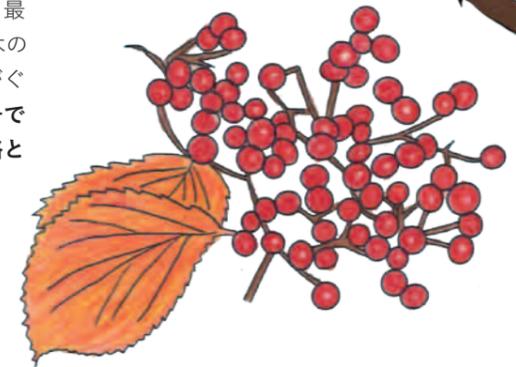
実りの秋。高尾山を歩くと、鮮やかな木の実が多く目にとまります。その理由のひとつは、高尾山に今なお多くの天然林が残されていて、多様性に富む森に約240種類にもものぼる樹木が生育しているからです。秋から冬にかけての高尾山は、一年の中でも最も多い約70種類の野鳥に出会える季節で、山内に実る様々な木の実が鳥たちを引き寄せます。野鳥たちにとって、昆虫の活動がぐっと減るこの時期は木の実が重要な食糧源となるのです。本号では、高尾山で秋に実る多様な木の実に注目し、その巧みな戦略と鳥たちとの関係に迫ります！



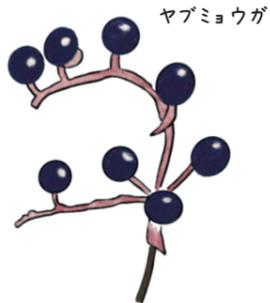
サネカズラ



ジョウビタキ



ガマズミ

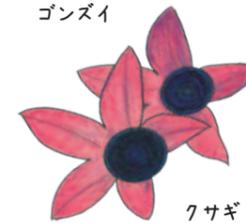


ヤブミョウガ



赤い果皮は熟すと裂けて、中から黒い種が現れます。

ゴンズイ



フサギ

「赤」と「黒」の魅惑

ヒト以上に優れた色彩感覚を持つ鳥にとって、赤い実や黒い実はとても目立ちます。さらに、黒っぽく熟す実の中には、その表面で紫外線を反射しているものがあり、紫外線領域まで見えている鳥にとっては、ひと際輝いて見えるようです。この対比する2色のコントラストをもつ木の実は、より効果的に鳥を引き寄せていると言えるでしょう。

小粒な実は体の小さな鳥にぴったり！

エナガやメジロなど、小柄な鳥の口はとても小さく、消化管も繊細。そんな鳥たちにもこの小さな実は容易に飲み込むことができます。



ムラサキシキブ

アカメガシワ



エナガ



のぶすまくん

歯がないから、実を丸呑みするのかな。だから実の中の種はこぼれなくて糞と一緒にでてこられるんだ！

高尾ビジターセンター ネットショップはじめました！

2020年の8月より、高尾ビジターセンターで販売しているオリジナル商品が、インターネットでもご購入いただけるようになりました！コロナ禍で遠方にお出かけできない日々が続く中、高尾山に来ることができない方にお家で高尾山を感じてほしい！そんな思いを込めて、高尾山の自然をテーマにしたオリジナル商品をご用意しています。



人気の「高尾山×ムササビのごはんてぬぐい」や、新商品の「シカの角ピンバッジ」など、自然好きにはたまらないデザイン&使えるグッズが揃っています。ぜひネットショップにも遊びにきてください！



待ってるよ～



ネットショップはこちら↓
<https://takaovc.raku-uru.jp/>

解説員 むらかみ vol.23

うれしい瞬間

「仕事をしていて一番うれしいと感じるのはどんな時ですか？そしてその理由は何ですか？」以前、団体で利用された中学生から、こんな質問をいただきました。少し迷いましたが、「ガイドウォークなどで、参加者の方が思わず発した、『へえ』や『えっ！？』、『おお』という声を聞くことができた時です。」と答えました。その理由は、私たち解説員がみなさんに紹介するのは、そのほとんどが、自分たちがおもしろいと思ったものや驚いたものなので、思わず出た声を聞くと、なんだか追体験をしていただけ気がすうれしくなるからです。

高尾山に毎日通っていると、構えているカメラが、興奮で震えるような場面に出くわすことがあります。初夏、渡ってきたばかりのオオルリが目前の枝にとまってさえずる様子を見られた時や、冬、薄暗い中を下山している途中に目の前をムササビが横切った時はしばらく胸がドキドキしています。そんな気持ちを、ビジターセンターにいらしていただいたみなさんと共有できることがとても楽しいのです。こう思っている解説員はきっと私だけではないと思います。

新型コロナウイルスの影響で、直接みなさんにご案内する機会が減ってしまいました。ホームページやSNSを通して、引き続き高尾山のワクワクをお届けできたらと思います！

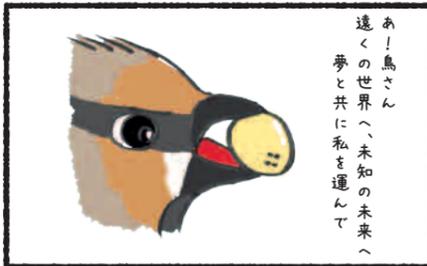
(解説員 むらかみ)

たかおさん

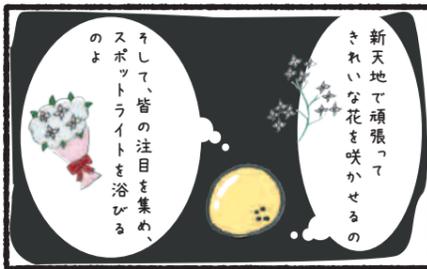
「ヤドリギの夢」の巻



私はヤドリギの実、広い世界に飛び立ち、大輪の花を咲かせるのが私の夢



あ！鳥さん、遠くの世界へ、未知の未来へ夢と共に私を連れて



新天地で頑張った、きれいな花を咲かせるの、そして、皆の注目を集め、スポットライトを浴びるのよ



ね！ね！の夢の中にヤドリギの種が入ってるんですよ

作・絵：さとう

「のぶすま」最新号とバックナンバーを高尾山山頂にある、高尾ビジターセンターにて配布しております。ご希望の方はビジターセンター窓口までお越し下さい。



高尾名物「高尾煎餅」誕生のあゆみ

旅行先にはその地域ならではの土産が店に並べられ、訪れた人々を楽しませてきました。高尾土産の代表格だった高尾煎餅の歴史を紐解いていくと、庶民の間で歌が詠われるなど特に親しみがあつた様子が窺えます。

旅行に行くのと1つの楽しみであるのがお土産選びです。高尾山でも様々なお土産が販売されています。例えば、天狗の顔の形をした焼き菓子やかりんとう、バラエティーに富んだお団子など、その人の好みのお土産を楽しめます。

江戸時代、高尾山で売られていた有名なお土産に、伊勢谷の「高尾煎餅」があります。高尾煎餅の歴史は古く、安永(1772~1781年)の頃、菓子店の「伊勢谷」大野七左衛門が「高尾煎餅」と名付けた煎餅を、登山者へのお土産として売り出したのが始まりだったそうです。幕末の頃の書物『八王子名勝誌』には現八日町付近の絵図に「高尾せんべい いせや 七左衛門」という看板が描かれています。

江戸時代の八王子宿は甲州街道にある大きな宿場町で、多くの人が足を休めていました。文政の頃(1818~1830年)には高尾煎餅が出てくる流行り歌が詠われていたそうで、当時庶民の間で高尾煎餅は親しみのあるお土産であったことが窺い知れます。

『八王子名物御存じないか
高尾せんべいに 三下り
いくし かへるし こんだ市
うんと まさかに やるべいか
かかあ天下に 塩そうだ』

その後、大正末年には高尾煎餅は30店舗以上で製造されるまでに発展したそうです。現在では、伊勢谷は廃業(1905年頃)しており、高尾煎餅を味わうことが出来ません。しかし、同じく老舗の菓子店である、「有喜堂本店(創業120年前後)」は、現在でも「高尾せんべい」を味わうことが出来ます。製造当初の高尾せんべいは、現在販売されているようなもみじ形ではなかったようですが、昭和10年頃にイロハモミジをかたどった高尾せんべいに変わったそうです。また裏面には当時の高尾を代表する景観場所の八ヶ所が焼き印されています。選ばれた八ヶ所は「見晴らし台の遠景」「城見坂の暮雪」「薬王院の梵鐘」「大杉山の夜の雨」「高尾橋の帰雁」「有喜閣の紅葉」「清滝の桜庭」「金毘羅山の秋の月」です。当時の高尾山の有名な景観場所をお菓子に焼き印し、後世に伝えようという菓子職人の想いが感じ取れます。

高尾山に訪れる人の足を止め、楽しい思い出に華を添える高尾のお土産。時代が移り変わっても、高尾山の魅力を菓子で表現しようとする想いは今に引き継がれています。ぜひあなた好みのお土産を見つけてみてはいかがでしょうか。

(解説員 おざき)

参考文献「武州高尾山をめぐる庶民の信仰」
「東京の山 高尾山 身近な自然を考える」

解説員の
ちおし
vol.19

気付けば意外とある冬虫夏草



カメムシに寄生して生えるキノコです。地上部に見える赤いきれいな形状に対し、落ち葉や土を除けてみるとカメムシの死骸から生えているという衝撃の事実！見た目も生態もこれがキノコだということもビックリで、なんだか惹かれる不思議な存在です。

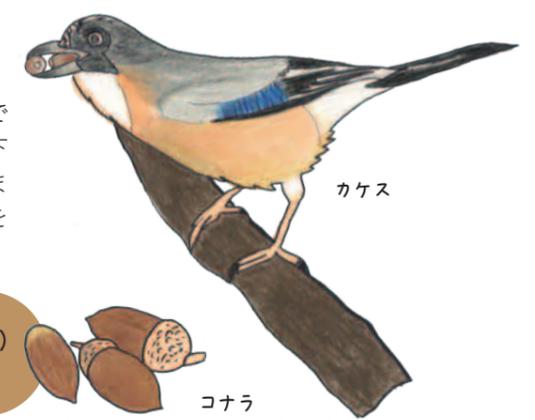
山頂周辺で見つけたものは、ホソヘリカメムシ、チャバネアカカメムシ、クサギカメムシなど、色々なカメムシから生えていました。

観察時期：夏〜秋
見られる場所：5号路、稲荷山コース、蛇滝コースなど

(解説員 やまもと)

『貯食』される実

一部の鳥の中には、見つけた木の実をその場で食わず、あとで食べるために土の中や落ち葉の下などにとっておく「貯食行動」をとるものがあります。食べ残された木の実には、新たな場所で芽を出すチャンスが訪れます！



高尾山はドングリのなる木(ブナ科)が15種類もあります！

ネバネバの実

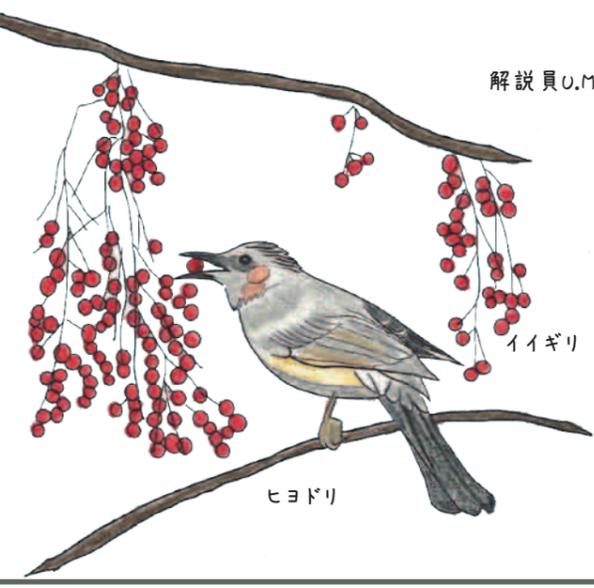
ヤドリギは、ケヤキやエノキなどの落葉樹につく半寄生植物(※)で、多くは木の高い位置で直径1mほどのボール状に成長します。半透明の黄色い実は、冬鳥のレンジャク類が好んで食べます。ねばり気のある果肉は消化しにくく、糞とともに出される種は糸を引くほどにねばります。木の幹や枝にへばりついて芽を出そうとする戦略です。食べた実をネバネバの糞にして種を運んでくれる鳥は、ヤドリギにとってなくてはならない存在です。
※自ら光合成を行い、寄生した植物から水や栄養分を吸収して生育する植物。



毎年ヒレンジャクがくる時期は、浄心門近くのケヤキの木に寄生しているヤドリギを観察しています。双眼鏡片手に木を見上げている解説員がいたら、ヒレンジャクがネバネバうんちをしているところかも!?

時間をかけて食べられる赤い実

赤い実は鳥に目立つので、すぐに食べつくされてしまうのかと思いきや、イイギリやガマズミ、ナンテンなどは、食べるものが少なくなってくる1月~2月頃までは、少しずつしか食べられません。種は、一度にたくさん食べられないことによって何度も分けていろんな場所に運ばれ、発芽できるチャンスが増えることとなります。木の実の種類によって様々な味(酸味、苦み、甘味など)を作り出すことで巧みに鳥をコントロールしているのかもしれない。毎年、1号路のイイギリの木を見ていると、ヒヨドリ以外にもツグミやシロハラなど、いろんな鳥が間近にやってくるのは私たちを楽しませてくれます♪



本号でご紹介した木の実は何れも、巧みな戦略と工夫で鳥たちを魅了し、その種を森のあちこちに運んでもらっています。ユニークな木の実の傍らには、種の運び手となる多くの野鳥の姿があり、高尾山の豊かな森の存続には欠かすことができない存在であることに改めて気づかされます。高尾山ではたくさんの木の実を観察することができます。見かけたときにはぜひ、足を止めてその戦略にも思いをはせてみませんか？そこに引き寄せられる鳥たちが実を食べ、種を運んでいく姿を探してみてください。

(解説員 うい)

参考文献：身近な草木の実とタネハンドブック(文一総合出版)、身近な植物に発見！種子たちの知恵(NHK出版)
高尾山の自然・文化・歴史文献資料集(高尾山自然保護実行委員会)
ハシブトガラスにおける味蕾の形態とその分布について 日本鳥学会誌 62(1): 1-8 (2013)